

踏み跡 < My mountains >

富士山	五合目から吉田口頂上往復	No.052
-----	--------------	--------

富士山麓での十余年の生活から都会での生活に変わると、富士山がどんなに小さくても、「見える」ということだけで何となく心落ち着き、また昔を思い出せそうな気になってくる。それだけこの山は、私の心の中に同居している。しかし、21歳の今日まで未だ一度も登ったことがない。

冬山経験では一歩先を行っている恩田の指導の下に、初めての冬富士登山に挑むことになった。ピッケル、アイゼンの本格的な使用法の体得という大事なステップでもある。

日本一の山に登るとのことよりも、一歩踏み間違えば青いアイスバーンを滑落して、棺桶に飛び込むことになるという「危険に取り巻かれて登る初めての冬山」と言うことの方が緊張を呼ぶ。

昭和40年10月17日

暗闇の河口湖駅に降り立ったのは、秋の寒さが身に染む4時30分。五合目行のバスを待つ数人のザックが駅の待合室に転がっている。

バスは5時30分に発車、乗客は十名足らずで外国人も数人乗っている。しかし頂上まで行きそうな身支度の人ばかりではない。「スバル360でも登れる」ということからスバルラインと名が付いたという話を聞いたことがあるが、事の真偽はわからない。なかなか良い道でバスの振動と揺れ方が眠気を催す。

二合目付近まではあの広大な裾野そのもので、ほとんど傾斜を感じさせない。

昔の富士登山の起点であった馬返しは、吉田口では1350m、須走口では1360m、御殿場口では1020m、富士宮口では2060mの高さにある。現代の登山の起点は吉田口五合目2300m、このあたりは北斎の絵で言うなら、長い裾野と垂直に近い鋭さで頂上に連なる線との境目あたりではなからうか。

5時45分、バスを降りたスバルライン終点は、すでに奥秩父と同じ高さ。黄金色の唐松は、出たばかりの太陽の光を受けて金色に燦然と輝いている。唐松の向こうは海拔2200m付近に広がる広大な雲の海。

売店でポリタンに水を詰めて、すぐに行動開始。奥秩父、北アルプス、ハケ岳が雲の上に出ている。時が経つにつれて(気温が上がるにつれて)雲海が少しずつ切れて下界の景色が見え始めてきた。

七合目、6時40分。いよいよ雪と氷が始まり、7合5勺付近でオーバーシューズ・アイゼンを付けてフル装備。唐松林もその下の原生林もはるか眼下に去り、アイゼンとピッケルが頼りの世界に突入。ピッケルを軽く突いただけでは石突は5ミリほどしか入らない。力いっぱい差し込んで抜いてみ



ると、細く空いた穴の中はコバルト色で、表面はわずかに粗目のようになっているが、「氷」そのものである。アイゼンもキシリと音を立てて先端が数ミリ入るだけ。この二つの道具以外に頼るものはない。

最大傾斜線を選んで足首を折るようにして直登していく。雪面の粗目状の粒の輝きとオーバーシューズの鮮やかな黄色が、まぶたに痛いような刺激をくれる。

八合目 3350m、我が未踏の標高に突入。酸素の少なさを感じないわけにはいかない。水と食料とカメラしか入っていないサブザックなのに、8貫のキスリングを背負っているかのように呼吸の乱れが早い。振り返れば、無限に続くような白銀の滑り台、足元が狂ったら1000m以上の滑落は必至と思われる。左手の吉田大沢は、山寺(立石寺)の滑り台を思わせる。

九合目の鳥居、吉田口頂上の稜線と鳥居が視界に入ってくる。黒い屏風岩も間近に迫り、あと一息。

吉田口頂上 3730m、9時20分。五合目から三時間半を要して到着。お鉢の向こうに3776mの剣が峰と測候所の赤い屋根が見える。風もことのほか強く、不用意に立っていると体がふわっと持ち上げられてしまう。

踏み跡 < My mountains >



剣が峰へは行かず、記念撮影のみで下山することにした。切れてきた雲海の間には山中湖がキラキラと光って見える。下りは登り以上に気を遣う。アイゼンを効かせて、斜面を一直線に下る。前にのめれば斜面を転がり落ちるだろうし、後ろに体を倒せば斜面を滑落、体は常に重力方向に向いていなければならない。一定の傾斜の斜面が果てしなく続いているということは楽なような気がするが、実はその逆で、特に冬山ではこんないやなことではない。アクシデント!! ハ合目あたり、小休止の後立ち上がった拍子にピッケルバンドが右手首から抜けてしまった。ピ

ッケルはしばしなよなよとしたかと思うと、頭から斜面を滑落していった。アツと声を発する間もなく左手の大沢へ、時々岩にぶつかりながら…。

「しまった!」という気持ちと同時に心臓の高鳴りを感じた。人間が斜面を滑り落ちる時の姿もきっとこんな風に違いないと思うと、鼓動は一層高まった。すぐに恩田が下ってくれた。痛々しく胴体に傷をつけたピッケルは、5勺ほど下の岩陰で雪に突き刺さっていたとのことだった。ピッケルだったからこそ、それに無事回収できたからこそその笑話である。七合目で風を避けられる場所を探して昼食、イナゴの佃煮がやたらに美味しい。

無事五合目まで下ってくると14時10分。吉田大沢で転落か滑落かによる死亡事故が発生したとかで、山梨県警のジープが行き来し物々しいシーンが始まっていた。

結局のところ、今朝出発して頂上にたどり着いたのは我々だけらしい。朝のバスで一緒になった人たちも殆んどハ合目までで引返しているらしい。しかし、ピッケルを流すようなお粗末な人には、遭難事件についてコメントする資格はないだろう。

バスを待つ間にも大沢を真ん中にした姿が、見上げる高さに雪面をぎらつかせている、はげ頭のようにテカテカと。五合目から見上げる頂上は、ちょうど芝公園から東京タワーを見上げた時のように、日頃遠景に見慣れた姿とはまるで違った富士である。

バスは15時15分発、ドライブ客と遭難救助で賑わう五合目を後に、スバルラインを快適に下って行く。

今回の山行で二人が意を同じくして虚心に反省するところがあった。それは、山頂の測候所の人たちに送ろうとバナナを持ってきたが、登りの途中で(ハ合目あたりだったか)疲れたので全部食べてしまったこと。しかし、剣が峰の往復と測候所訪問を中止した理由は、あくまでも強風によるものだったことを強調しておきたい。軽い雪盲になったようで、電車の中で向かいの席に座った女性の顔がボンヤリとしか見えず残念だった。

<後日談>

私のピッケルのシャフトには傷がある。この山行で胴体に負った傷を見るたびにあの時のことを思い出し、ピッケルバンドの位置を確認し、石突がきちんと突き刺さることを確認、そして脇をギュッと引き締める習慣がついた。その後数多くの冬山を体験したが、おかげで大きな事故を体験することなく、命を落とすこともなく今日まで来ることができた。一度の失敗から得た教訓は偉大だったというと格好よすぎるが、それが本音である。



<富士山頂稜線・測候所が遠くに見える>

以上

(修正・更新:2023年10月)